

朝比奈なをの「教育困難校」論

— 『見捨てられた高校生たち』と『置き去りにされた高校生たち』の比較—

Asahina Nao's thought for school with difficulty on education:
Comparison between *Forsaken highschoolers* and *Marooned highschoolers*

生駒 忍¹⁾

Shinobu IKOMA

概要

フリーライターの朝比奈なをによる、「教育困難校」を論じた2冊の単著を取り上げ、主張とその変化について分析した。本稿で検討対象に挙げたのは、「教育困難校」という用語とそのプライオリティ、経済的貧困の背景、「愛着障害」の採用、生徒の類型化、電子メディアからの影響、調査結果の取り扱い方である。これらから、今後の成長の方向性に関して示唆を得た。

キーワード：教育困難校，底辺校，高等学校教育，愛着障害，不登校，子どもの貧困

Abstract

Asahina Nao, a Japanese freelance writer, published *Forsaken highschoolers* and *Marooned highschoolers*. This short review discussed the claims in, originality of, and their variations between the books; the priority on the terms, backgrounds of the child poverty, introducing of the concept of attachment disorder, the types of the highschoolers, the effects of electronic media, and the research data handling strategies. The suggestions for further progress were discussed.

Keywords: School with difficulty on education, school at the bottom of the social pyramid, high school education, attachment disorder, school refusal, child poverty

1. はじめに

朝比奈なをというフリーライターがいる。教育学の修士号をもち、公立高等学校の地歴・公民科教諭を経験したが家庭の事情で早期退職した後、大学非常勤講師や進路アドバイザー、執筆・講演活動などで広く活躍している。得意とするテーマは、中等教育や高等教育のうち、多様な子どもたちが入学するタイプの場の諸問題である。朝比奈はこれらの場を「教育困難校」や「教育困難大学」といった表現の下で取り上げ、現場の目線を重視しての問題提起を行っている。

いわゆる教育困難校をめぐるのは、古賀（2001）をはじめとして、教育社会学者による検討は国内でも多く行われている。また、イギリスでのエスノグラフィであるウィリス（1996）の、不良の反学校的文化から社会階層の再生産を浮かび上がらせる論考はよく知られているし、アメリカについてはマクラウド（2007）

¹⁾ 共栄大学 教育学部（非常勤）

などに類似した要素が描き出されている。朝比奈は、大学院教育を受けてはいるが学術研究者ではなく、これらのような深い分析は得意とはしていないようである。むしろ、今も現場の教育者としての視点を保ち、現実を平易に述べて一般社会に届きやすいかたちで問題提起を行っている点で評価されるべきライターである。

朝比奈の現場主義は、教育問題に関する執筆では特に強く求められるべきことである。なぜなら、この分野では、現実に即しない机上の「教室」を本にする者が少なくないという問題があるからである。たとえば、佐藤（2000）は、「教育の「危機」は商売になる」（p. 5）として、学級崩壊の実際を見ずに、もっぱらマスコミが流布した崩壊の「うわさ」に基づいて、「学級崩壊」をタイトルに掲げた本が次々と書かれたことを批判している。一方で、直接取材でありのままを見せることを売りにしつつも、露悪的、揶揄的な列挙に終始する日本底辺教育調査会（2012）のような案件は、朝比奈は全く行っていない。そのため、教育問題に対する正統かつ有効な問題提起を行い、社会を動かすライターとして注目し期待する価値がある。朝比奈に似た立場では、同様に埼玉県において公立高校教諭の経験がある青砥恭がいるが、こちらは執筆が活動の中心とはいえ、また、学校自体よりも、子どもの貧困や「居場所」への関心が大きいようである。なお、青砥は日本底辺教育調査会（2012）の末尾に、異質な原稿を寄せている。

そこで本稿は、朝比奈による単著である『見捨てられた高校生たち 知られざる「教育困難校」の現実』（2011）と『置き去りにされた高校生たち 加速する高校改革の中での「教育困難校」』（2019）とを取り上げ、ほぼ同テーマを扱った2冊を対照させつつ、朝比奈の主張や視点、ならびにその変化をとらえること、および今後の成長の方向性を考えることを目的とする。両書とも同一の判型で、ページ数は後者がやや多いが行あたりの字数がやや少なく、イメージ写真のみのページもあることから、分量も大きくは異なる。両書とも雑誌『月刊高校教育』『中等教育資料』などで知られる教育系出版社の学事出版から公刊されているが、おそらくは編集者がプロとして子細まで主導権を握ってイメージ通りに書かせるようなかたちではなく、おおむね筆者の書きたいように書ける場であると思われる。両書とも誤字脱字が散見されるままで流通していることから、編集の立ち位置がうかがえる。したがって、前述のような目的で取り上げることに適した特徴をもっていると考えることができる。

なお、以降では便宜的に、2冊のうち前者を『見捨て』、後者を『置き去り』と省略表記することとしたい。あえて強烈的な語感を残すことで、ハーバード方式の無機的な表記よりも、朝比奈らしいリアリティの感覚に近づけるとの想定もある。単に「両書」と書いてある場合は、この両書を指すものとする。また、「教育困難校」というかぎ括弧つきの表記が繰り返し登場し、ややくどい印象を受けるかもしれないが、朝比奈が両書で一貫して用いている表現方法に合わせて、後述のように朝比奈が定義を与えて指し示している「教育困難校」の話題である事を明確にするためである。

2. 成立の経緯

本題に入る前に、両書の成立の経緯について確認しておきたい。まず『見捨て』であるが、これは新風舎から2006年に自費出版された『見捨てられた高校生たち 公立「底辺校」の実態』がオリジナルである。しかし、新風舎はちょうどこの年、年間出版点数が国内トップの2,788点という異常な値を記録した後、2008年に倒産した。朝比奈は事業を引き取った文芸社との再契約には進まず、教育系の出版社である学事出版と接触、改題して再度の公刊にこぎ着けた。内容の大筋は変えていないが、タイトル等で「底辺校」から「教育困難校」へと表現を改めている。また、本文冒頭ページでの「学園物」作品の列挙の中に『ハガネの女』があることや、あるいは「2005年にこの本を出した時、定時制高校の教師の方々からの反響が予想外に多かった。」（p. 29）とあり、自著の公刊年を書き誤っていることはともかくとしても、このように再刊時に追加したことが明らかな箇所もある。

それから7年3か月後に、同じく学事出版から公刊されたのが『置き去り』である。こちらは、書き下ろしであるともそうではないとも書かれていないが、最終ページでほのめかされているように、経済誌に起源をもつ人気ウェブサイト「東洋経済オンライン」で2016年10月から1年半にわたっての連載歴があり、その前半部分からかなり転用されている。

3. 「教育困難校」の定義とプライオリティ宣言

両書とも「教育困難校」という表現を書籍の副題に含み、論考の主題にしている以上は、そこでの「教育困難校」の定義を明確にすることが重要である。しかし、『見捨て』では整った定義は扱われないうまま登場した後に、教育委員会などが「底辺校」を言い換える際の表現であることや、数多く使われているが偏差値での明確な線引きが見当たらないこと、「底辺校」よりも意味が広く、定時制高校やサポート校を含みうる表現としてより適切であると考えられるようになったことなどが述べられている。

ところが、『置き去り』では第1章の書き出しが、「教育困難校」という言葉は筆者が使い始めた言葉であり、一般的にはまだあまり知られていない。(p. 14)である。そして、「教育困難校」の定義を、「家庭環境や成育歴、本人の能力的な特性などによって学習意欲や興味・関心がとぼしくなってしまう、入学後の教育活動で個々の能力やスキルを伸ばすのが難しい学校」(p. 17)とする。操作的定義ではないこと、「教育困難校」になる原因を教師や教育行政には置かず、「とぼしい」入学者が来るせいとでも言わんばかりであることには批判もあるが、この定義自体は管見の限りでは他で明示されてはいないものであり、そういう意味での用語のプライオリティを主張しているものと考えたい。もちろん、いわゆる教育困難校にこの定義に含まれるような特徴がみられることは、ウィリス(1996)を含めてすでに多くの報告例があるが、そこを定義に入れたことが新しいという意味である。「教育困難校」という表現自体がはるか以前からあることは、CiNiなどのデータベースで誰でも分かることであり、朝比奈がこの5文字を使い始めたと思っているわけではないことは自明である。

なお、朝比奈が大学教員の業務を始めた後に書かれ、高大接続や大学の授業崩壊に関しても触れている『置き去り』でもまだ用いられていないが、朝比奈は東洋経済オンラインの連載においては「教育困難大学」という表現を用いている。朝比奈による定義は、「高校からの連続性を踏まえて、どのような学力の志願者でも受け入れている大学」となる。先取権に関心があるかは分からないが、こちらのほうは先立つ用例が少なく、プライオリティの主張を図れば受け入れられやすいと思われる。

4. 経済的貧困の背景

子どもの学力が貧困の度合いの高さとの間で負の相関を示すことは、今日では広く知られるようになった。一方で、経済力が学力を規定するという単純なモデルでは不足があることも、生駒(2011)、志水(2014)などで指摘されている。朝比奈は、『見捨て』では経済面の貧しさの問題を直接には提示しつつも、家計の収入自体が極少であるとは限らず、子どものほうに回せるお金の乏しさの問題であることもうかがわせている。高価な宝飾品を身につけ、タバコやパチンコにかなりのお金を回し続けることに、「お金の使い方の優先順位が違うのではないだろうか」という疑問(p. 129)を向ける。離婚後に子どもを連れていっておきながら、新たに見つけた異性のほうにお金が回っていくような事例も複数提示される。

経済的貧困の問題は、『置き去り』でも引き続き登場するが、書籍全体に占める割合は減っている。両書の間にはアベノミクスが歴史的な低失業率を生み出し、貧困層を底上げしていることが反映されているようにも見える。『見捨て』では帯の最も大きなフォントの部分にまで挙げられた「テーマパーク未経験」の問題

も、『置き去り』には登場しない。テーマパークの話題は、「親からも先生からも「大学はいいところだ」「自由で楽しいところだ」と言われた。だから、ディズニーランドみたいな面白いところだと思っていた。こんなに勉強をさせられるところだと思っていたいなかった」(p. 101) という、「多様な学力層が通う大学の1年生」の声として登場するのみとなったのは皮肉である。

一方で、子どもの塾代に家計を回すことで、他の面の貧困が生じるというパターンも明らかにされている。『見捨て』ではやはり帯にまで挙げられた「医者に行けない」問題も、『置き去り』では「ある中学校の養護教員は、歯科や耳鼻科の治療を促しても、経済的に厳しい家庭はその治療代よりも塾代を優先すると嘆いていた。」(p. 192) というかたちで登場する。そして、「自分で教えることができない保護者はとりあえず塾に通わせておけば何となく安心と考えるようだ。」(p. 193) と、親の低学力、低学歴からの連鎖をうかがわせている。これも、ウィリス (1996) を含む多数の知見や論考での話題と対応する論点である。国内での近年の知見でも、松岡 (2019) の体系的、定量的な検証があるほか、中村 (2019) のルポルタージュにも、こういった格差の再生産の諸相がうかがえる。

5. 「愛情渴望症」から愛着障害へ

親からの愛情の貧困も、両書で共通して大きく問題視されているテーマである。『見捨て』では、「愛情渴望症」なる診断名風の表現が、本文では第1章、章題では第4章に登場する。そして、主に第4章でこの話題が扱われている。

一方で、『置き去り』ではこの表現が消え、代わる位置に採用された用語が「愛着障害」である。両書の公刊の間は、発達心理学ないしは小児精神医学で用いられてきた愛着障害の概念が、一般社会へ浸透した時期である。精神医学の立場から愛着障害を論じた岡田(2011)がベストセラーとなり、続編にあたる岡田(2016)も公刊されている。『置き去り』のほうで、「教育困難校」を教育困難にしている要因に愛着障害の概念を当てはめることとなったのは、これらの流れからの影響である可能性が考えられる。一方で、愛着障害については、朝比奈は公立高校の教諭を経験していることから、ごく簡単ではあっても、教員採用試験への対策ですでに学んでいたはずとも考えられる。たとえば、時事通信出版局 (2019) は、「愛着障害」を、教員採用試験における教職教養分野の試験対策における重要ポイントのひとつに挙げている。

愛着の問題は、朝比奈が視点を向ける諸問題に広くつながっている。両書とも、目に見えやすいかたちの愛着に着目しがちであったが、むしろ正反対のようにも見える校内暴力とも関連させて議論することもできるだろう。発達障害に関連して、「思春期は第二の幼児期と言われるほど、「甘えたい・依存したい」欲求が強まる時期です。幼児期と同じ気持ちを同じ行動で示すわけにはいきませんから、子どもたちは変わったやり方で表現します。乱暴な行動や言動もその一つです。」(塩川, p. 57) などとも言われていることから、粗暴行動と、朝比奈が両書で取り上げている発達障害と、愛着の問題とがつながることも考えられる。また、後述するスマートフォンの悪影響についても、愛着形成の妨げとなるという清川・古野・山田 (2014) などの指摘から、いずれつながっていくことが予想される。

6. 「教育困難校」の生徒の類型化

すでに「教育困難校」自体が等質なカテゴリではない上に、その生徒もまたいくつかの下位グループに区分できるというのが筆者の主張である。しかし、それがいくつかは両書で考えが分かれている。『見捨て』では、「教育困難校」の生徒の3類型」という節をおき、不登校を経由した「本来持っている能力は高い生徒群」、周囲をさんざん疲弊させてから中退していく「いわゆる「ワル」タイプ生徒群」、積極性が欠如した「無気

力で全く生気が感じられず病的に学力が低い生徒群」の3群を見出した。いわゆる教育困難校、あるいは「底辺校」の語感から外部の者がイメージしやすいのは、ウィリス（1996）での「野郎ども」のようなタイプであり、そのさらに向こう側には、松本（2009）や宮口（2019）のようなさらに理解しがたい世界がつながっているわけであるが、ここでの分類では「いわゆる「ワル」タイプ生徒群」に相当する。朝比奈の指摘は、むしろ相対的に目立ちにくい他の2群の存在を具体的にとらえていることに意義がある。そして、明らかに異なる対応がされるべきこれら3群が混在することこそが、「教育困難校」の本質であることが浮かび上がる。

これに対して、『置き去り』は「4タイプの生徒たち」という節で、表1のような4類型を提示している。『見捨て』の3群はそれぞれ、2, 1, 3に対応する。そして新たな群として、「外国に何らかのつながりを持つタイプ」をおき、最近増えているとして説明を加えている。さらに数が増えて計4タイプとなった、問題の質が異なる生徒の混在が生む混乱も、もちろん述べられている。

表1 『置き去り』における図「教育困難校の4タイプの生徒たち」

1 やんちゃタイプ (ヤンキー系)	2 不登校経験タイプ (不登校系)
3 おとなしめタイプ (無気力系)	4 外国に何らかのつながりを持つタイプ (外国系)

ここで疑問を生むのが、このように図示したねらいの理解しにくさである。単に4件を並列するのであれば、2行2列のかたちには組む必要はなく、そもそも文中で順に述べれば済むことである。『置き去り』で唯一の図であり、あえて示した意図があるはずと思われるが、見方の説明は見当たらない。下の行はつまづきを個別にフォローすることがより有効なグループで、上の行は比較的そのような効果が弱いグループ、左の列は発達障害を含めて生得的な気質ないしは特性が効いていそうなグループで、右の列は特性とは無関係に多数派とは異なる経験によって適応に困難を来しているグループ、といった解釈が考えられそうではある。どこかの機会に、朝比奈自身による解説があることを待ちたい。

7. 電子メディアの影響

ゲーム、スマートフォン、動画サイトの悪影響が、多様な事例でたびたび登場するようになったことも注目に値する。生徒自身だけでなく、生徒を「とぼしい」状態に留める保護者の問題の中にも、これらが少なくない。さらに、一般成人の問題としてまでも登場している。両書の間7年間を、『置き去り』は「前掲書から約7年が過ぎ、この間に日本の教育は大きく変化した。後に述べるが高校教育も例外ではない。」(p. 5)とするが、むしろこの間のスマートフォンなど電子メディア関連の変化はさらに劇的であり、わが国の教育をめぐる環境を大きく変化させたことがうかがえる。また、樋口（2015）は、スマートフォンやそれを通してのネット依存の問題への警鐘を鳴らす中で、そのような依存のリスクファクターとして、アスペルガー症候群、対面でのコミュニケーションの苦手さ、現実社会での「居場所」のなさなどを挙げているが、これらはいずれも、朝比奈が「教育困難校」の多様な生徒の類型化の中で示したパターンに含まれる。したがって、一般社会や中堅校以上に、「教育困難校」での影響が大きいことが推測される。

8. 調査結果の取り扱い

調査データを盛り込んで論旨の補強を図ることも、『置き去り』ではやや増えている。高校教師からジャーナリストや大学教員としての活動へと変わったことの影響があろう。実証的知見を取り上げて活用する姿勢は、歓迎されることである。ただし、調査に関する理解においては、なお不十分な点が散見されるため、ここで例示しておきたい。

両書とも発達障害に関する言及は多いが、この話題に関して『置き去り』は、「文部科学省が2012年に発表した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」によれば、全児童の約6%が発達障害であるという結果が出て、教育関係者に衝撃を与えた。しかし、実際にはこの数字より多いというのが、義務教育段階の教員の印象ではないだろうか。」(p. 158)とする。その調査において「知的発達に遅れはないものの学習面、各行動面で著しい困難を示す」とされたことを発達障害と断定していると考えても、実際の数値は「全児童の約6%」ではない。小学校では7.7%であり、その95%信頼区間も6%台にはかすりさえしない。小中学校を合算した有名な数値が6.5%であるため、これを誤認した上で、理由は不明であるが四捨五入ではなくISO丸めによる端数処理を行った可能性がある。

ごく基礎的な教育データに関しては、「義務教育段階で不登校になる児童・生徒の数は、2017年に約14万人を超え、過去最高となったことが文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題」速報値で判明した。」(p. 162)とする。しかし、公刊時期からみてこれは平成29年度の値と思われ、つまり2017(平成29)年の1年間の値ではない。過年度分と速報値とから線形補間等で推定した、2017年1月～12月に相当する値が「約14万人を超えた」という意味なのかもしれないが、飛躍を補完しないと読者は誤解しかねない。

社会調査データも登場し、「また、電通総研電通若者研究部が2013年に行った調査(「好きなものまるわかり調査」)も見ておこう。… 芸能人・アイドル、ファッション、読書(マンガ)がベスト10となっている。」(pp. 108-109)とあり、有効な論旨補強として用いられており興味深い。ただし、この調査結果の発表は2013年3月であったものの、調査を行ったのは2012年12月であり、誤りである。また、ベスト10の4位がマンガであって、10位はマンガではなく「読書(マンガ以外)」である。

9. おわりに

本稿では、気鋭の教育ライターである朝比奈なをの「教育困難校」論について、2冊の単著の比較から取り上げてきた。全てを拾ったわけではないものの、主な主張やその変化を整理し、また、今後の成長の方向性に関する示唆も得られた。

朝比奈は最近、新書として『ルポ 教育困難校』(2019)を著している。ついに「教育困難校」からかき括弧が外れて一般語化されたことも興味深い。一般に広く流通する新書の公刊を機に、さらに活躍の場を広げることが予測される。今後の動向や、そこからの社会的影響についても、今後追っていきたいと考えている。

引用文献

朝比奈なを、『見捨てられた高校生たち』, 学事出版, 2011.

朝比奈なを、『置き去りにされた高校生たち』, 学事出版, 2019.

生駒忍, “体力は経済力とは無関係に学力と相関する一小・中学生全国調査データの定量的検討一”, 『チャイルド・サイエンス』, 7巻, 2011, pp. 54-57.

樋口進, “増加するネット依存症の現在。”, 『潮』, 2015年6月号, pp. 72-77.

- 清川輝基・古野陽一・山田真理子, 『ネットに奪われる子どもたち～スマホ社会とメディア依存への対応～』, 少年写真新聞社, 2014.
- 古賀正義, 『〈教えること〉のエスノグラフィー「教育困難校」の構築過程』, 金子書房, 2001.
- 時事通信出版局(編), 『教職教養の要点理解 '21年度』, 時事通信社, 2019.
- マクラウド, J. 南保輔(訳), 『ほくにだってできるさ アメリカ低収入地区の社会不平等の再生産』, 北大路書房, 2007.
- 松本隆志, “不良物語という名の搾取構造”, 関西学院大学社会学部紀要, 108巻, 2009, pp. 85-98.
- 松岡亮二, 『教育格差—階層・地域・学歴』, 筑摩書房, 2019.
- 宮口幸治, 『ケーキの切れない非行少年たち』, 新潮社, 2019.
- 中村淳彦, 『日本の貧困女子』, SBクリエイティブ, 2019.
- 日本底辺教育調査会, 『ド底辺高校生図鑑』, 扶桑社, 2012.
- 岡田尊司, 『愛着障害 子ども時代を引きずる人々』, 光文社, 2011.
- 岡田尊司, 『愛着障害の克服 「愛着アプローチ」で、人は変われる』, 光文社, 2016.
- 塩川宏郷, 「発達障害を持つ子どもの思春期」『親子で乗り越える思春期の発達障害』, 河出書房新社, 2016, pp. 56-57.
- 佐藤学, 『「学び」から逃走する子どもたち』, 岩波書店, 2000.
- 志水宏吉, 『「つながり格差」が学力格差を生む』, 亜紀書房, 2014.
- P. ウィリス, 熊沢誠・山田潤(訳), 『ハマータウンの野郎ども 学校への反抗 労働への順応』, 筑摩書房, 1996.

